

良寛の思想について

96K018 本多大峰

はじめに

生まれ育った故郷は人間の心の原点であるといわれる。良寛は海の向こうに佐渡が見える出雲崎に生まれた。江戸時代は佐渡の金銀を運ぶ重要な宿場町として大いに栄えた。そんな町の名主の長男として育った。将来は名主になる人間として教育され、富と栄誉は約束されていた。しかし、良寛はこの生き方を捨てて乞食僧の道を選んだのである。手まり上人として子供達と遊ぶ良寛像は、一風変わった僧として良寛をかたづけてしまいがちだが、その内実は恐ろしく自分に厳しく勤勉であり、確固たる信念のもとに乞食僧として生きたということが解かってきた。出雲崎で生まれ、その自然の成り行きで我々の考える良寛になったのではなく、悩み、自己と葛藤しながら、後の良寛という人間になっていったことを知った。すべてを悟った上で自分の生き方を決定した。

現代の日本人は社会生活をするにあたり、物質的には恵まれている。しかし不思議なことに、財貨や物質には不自由しないのに内心では不安におののき、精神的に満たされない日々を送っている人は多い。高度経済成長を経験し、物質にさえ恵まれれば幸せになれる、金があれば幸せになれるという考え方が大きな歪みとなり、それは現在の物質文化の諸問題に大きく影響しているように感じられる。

良寛の生きた時代は徳川末期の封建社会で、立身出世を望む者が多くいた。財貨に恵まれれば安定した生活を得ることができるといった考えは、何も最近のことではない。その中で自ら乞食僧の道を選んだ良寛の生涯は、我々の生活の中で何が失われたのか、大切なことは何なのかを教えてくれる。良寛が何を願って生きたかを知れば、私たち現代人に進むべき道を導いてくれるのではないかと考えている。

第一章 良寛の性格の形成

1. 出雲崎橘屋

良寛は出雲崎の名主兼神官の橘屋山本家に長男として1758年に生まれたといわれている。その頃の出雲崎は北陸道の主要な宿場町であり、佐渡の金銀を陸揚げする港町として栄えた。江戸時代は天領であり、7万石の領地を支配する代官所が置かれていた。橘屋はこのような土地の名主であるから富と栄誉を兼ね備えた名門であった。しかし、良寛が生まれた頃は出雲崎港が大型化した幕府御用船が入港するには適さない港になりつつあり、隣町の尼瀬港のほうがそれに適した港であった。このため、自然と経済と政治の実権が尼瀬の名主京屋に移っていった。良寛は生家の権勢が傾きつつあった頃に生まれたのである。

幼名を栄蔵といい、学問に熱心な少年であった。北越三大儒者の一人と呼ばれた大森子陽の学塾三峰館で漢学の基礎を学んだ。学問は優秀だったようだが、内向的な性格で社交的には人より劣っていた。長男であるがゆえに18歳の時に、社会的には不器用であるが、名主見習職を継ぐために三峰館を中途退学させられてしまう。資質的に見て、社会生活に不器用な人間が役

所と直接結びついた民政を担当することなど困難であったに違いない。やがて栄蔵は家を捨てて出家する道を選ぶのである。名主としての富も栄蔵も捨てての出家であり、安泰の生活に見切りをつけたことに、栄蔵の芯の強さを見ることができる。後の生き方を見てもそのことが判る。

出家の理由はさまざまなことが考えられるが、横暴な父からの逃亡ということが挙げられる。父の以前は名主としてのプライドを持ちすぎていたことや、権勢が傾きかけているあせりもあり、世間とさまざまなトラブルを起こしていた。中でも、良寛出家に有力な関係があるのは、町年寄敦賀屋に対しての挑発行為であると思われる。敦賀屋には栄蔵と三峰館時代の友人富取長兵衛が跡取り養子に入っていた。かつての学友が自分の父に理不尽な攻撃をされていることがたまらなかった。このことが栄蔵にとって一番つらいことだった。栄蔵に残された道は世俗を捨てて仏門に入ること、それは父からの逃亡であり、権力や富という抗争の原因であることからの逃避でもあった。この道を選んだことが栄蔵にとって、本当の自分の生き方を取り戻す手段だったのである。

2. 国仙との出会い

禅寺では行者といって、受戒得度していなくても雑用などをして働くものがある。18歳で家を飛び出した栄蔵はこのような日雇い労働で生活をしながら、近隣諸国を回り高僧といわれる人々から知識を得ようとしていた。受戒して僧になるには遮難のないことが条件である。遮難とは20歳に満たない者、両親の許しが無い者などであるからこの時点では栄蔵はまだ僧になっていない。だが栄蔵には、そのようなことは関係無かった。出家は住職になるとか、立身出世をする為ではない。父への強いこだわりがこのような行動に表れている。栄蔵を失った父以南は弟の由之に正式に名主職を継がせた。栄蔵が家を出て3年が過ぎてからのことであった。父が栄蔵の出家を認め遮難が取り除かれた瞬間である。

この翌年安永8年、22歳の時に尼瀬の光照寺に授戒会のために立ち寄った備中国玉島の円通寺住職大忍国仙の戒を受けて出家をはたした。幼い頃儒者をめざして日々勉強したが学者にはなれず、家を飛び出して僧になろうとして諸国を放浪したが、結局故郷に帰るしかなかった。しかし国仙に出会ったことにより一人前の僧となった。栄蔵は国仙に出会ったことが何よりも救われたことであった。自分を仏道に導いてくれる高德の僧であり、知識でもあると認識し、また国仙のほうも栄蔵を一目見て、そのただならぬ器量を見抜いて出家させ大忍国仙の門弟として大愚良寛の法号を与えた。外見や行動は愚者のようであるが、凡人の目には見えない心の広さを良寛は持っていた。国仙がこのような素質を見抜く眼力があったことにより、のちの良寛という僧が誕生したのであるから、お互いの出会いが優曇華（うどんげ）にたとえられるように奇跡だったというしかない。

3. 自己との葛藤

国仙に連れられて、自分の生きるべき道を見つけた良寛は円通寺で黙々と修行をこなした。しかし当時、純粹に僧徒の修行の場や信者の信仰の場となっている寺院は少なかった。仲間である修行僧はただ住職になって生活の安定を望むだけの者が多かった。彼らにとって修行は住職になるための形式だけのものでしかなかった。また曹洞宗を例に挙げれば、本山争いを展開する権力闘争にあけくれたものであった。仏門も世俗と何も変わらない世界だったのである。

このことに良寛はひどく落ち込んでしまう。家門を捨て、世俗を捨てた者にとっては想像もしていなかったことである。近世の仏教は幕藩体制の中に組み込まれ、保護されつつも政治の末端機構として機能する存在である。良寛はこのような仏教世界を見切り、自己探求の行脚を開始するのである。

また良寛は後に長男としての役割を果たせなかったことに、父への懺悔の心が働いている。かつての栄華を極めた橋屋も没落し、良寛38歳の時に父は自殺をしてしまう。一つの権力にしがみつき、家運の絶えるのを恐れた父がこのような最期になってしまっただけで哀れでならない。名主として権勢におごる生活をしてきたが長くは続かず、その何倍ものつらさを残していったようだ。この出来ごとにより、良寛は祖師道元の遺戒「郷に帰るなかれ」を破って故郷へ帰還し、みづから忍辱（にんにく）の姿で懺悔しようとしたのだ。

第二章 自己探求

1. 宗龍との問答

良寛は円通寺に赴き、国仙の下で修行に励んでいたが、国仙と並び多大な影響を与えたのが越後紫雲寺村の宗龍和尚であった。28歳の頃である。良寛が後に乞食僧という生き方を決心したのも宗龍和尚との問答によるものである。宗龍自身もかつては常乞食僧という乞食のみによって生きた修行僧であった。そして観音院をはじめとして宗賢寺、大隆寺の住職を勤めたが、いつも後進に道を譲って寺を持ちつづけることはしなかったという。寺に安住しては難民救済が出来るはずがないという信念を持った人であった。江戸時代は封建制度の末期でもあり、またさらに幕府がキリシタン禁制の手段として仏教寺院を利用したことにより、かろうじて社会上の地位を保つにすぎないものになってしまった。本末制度と寺檀制度により、世俗権力のみでは到底成しえない支配体制に仏教の力を利用した。それは寺院側も檀家との関係を世俗権力が保証してくれることであり、お互いに願ってもないことであった。このような過程で仏教による葬式、法要が普遍化し制度化されることになった。このような葬式仏教の寺に住むのはまちがいでであると良寛は宗龍に意見を述べた。その問答を引用する。

良寛がまず宗龍に問いかけたことは、誌公観音と達磨観音とどちらが本当の観音であるのかということであった。誌公は宝誌または宝公といい、梁の武帝の帰依をうけた超俗非凡の禅者である。達磨が西来し武帝との間に有名な廓然無聖の問答の結果、互いに契わず達磨は武帝に見切りをつけて北に去った。茫然たる武帝に「達磨は仏の心印を得た観音大士なのだ」と教えたのが誌公であった。達磨が観音だとすれば、それを知っていた誌公もまた観音であり、両者はすべて観音にはかならぬとした。達磨は心契わなければ武帝をも見限って跡方を絶する真の観音であり、誌公は武帝に仕え俗界にとどまる方便の観音と見られる。どちらが真の観音なのかという良寛の問いには、檀信徒にかまされた観音院に住持する宗龍禅師を前に、あなたは誌公観音の立場だと思うが、そのような方便を超えたところにこそ達磨の真実があるのではないかと問いかけた。これに対する宗龍の答えは、およそこの世に在る以上、世俗と交わる方便の観音をまぬがれることは出来ないのではないか、というものであった。宗龍は寺持そのものを否定しないが、寺に安泰しては衆生済度の大願は果しえないという考え方の持ち主でもあった。そのあたりの機微を若い良寛に求めることは、やはり限界があったかも知れない。

良寛は達磨そのものの生き方をここで目指したと考えられる。この問答により後に乞食する托鉢行脚僧として生きる道を決意したのだ。そして理論派だった良寛も、やがて仙桂和尚を理

解できたのではないだろうか。仙桂は円通寺時代の兄弟子にあたる。当時、良寛は誰よりも参禅、読経などに修行熱心な僧であった。反対に仙桂はただ黙々と畠で野菜を作り僧たちに食べさせるという典座職の僧である。若い良寛は理論派だったこともあり、仙桂の実践は愚かに見えたに違いない。だが寺を持つことがすべてではなく、読経することが真の修行なのかようやく解かってきた。愚者のように見えた仙桂はすべてを知ったうえで作務をしていたのである。それは後に良寛が乞食僧として生きたことに、真意を知らない者が愚者という理解の仕方良寛をかたづけてしまうことと同じことである。

仙桂和尚の実践の生き方に学び、良寛はこの精神を行動するしかないといひそかに心に決めたのであろう。それは名主職を捨てた時と同じような心境であった。極貧な生活を続けながら、高僧の知識を得る。それは、かろうじて生きることのできる日々であったが、精神的には希望に満ちあふれ、天をも衝く勢いで勉強した。良寛が所属している曹洞宗門は、権力に保護された世界である。目指した純粋な意味の庶民救済のためのものではない。こんな世界に存在しているだけでも罪の意識にとらわれていたであろう。愕然とした良寛に、生きる道を教えた懺悔の心を持つ宗龍がいかにか高徳だったか解かる事実が遺品の中から証明されている。糞掃衣（ふんぞうえ）という捨ててある古雑巾を拾い集めて継ぎ合わせ、その糞掃衣の僧衣の袈裟とした。また三世の仏を描いて「南無三千仏」と血書し、罪を懺悔する仏名会の本尊として用いたのである。この宗龍の思想と仙桂の実践行が後の良寛を形成したと考えられる。

2. 懺悔の帰郷

良寛は円通寺に来て、足かけ十二年目にして国仙から印可の偈を与えられた。これは寺の住職になることを公認されたものであった。だが良寛は寺の住職になることへの抵抗感があった。住職になっても、この宗門のなかでは世俗に貢献することなどできないと考えた。仏教活動は基本的には出家者が在家者を教導し、在家者が出家者を経済的に援助するという構図になっている。ここで在家者を教え導くことなど想像もしなかったことだろう。そこで良寛は真の仏性を求めるまでは修行をやめないという信念に基づき、放浪行脚の旅に出たのだ。その行程にはひどく落胆した良寛の様子が伝わってくる。近藤万丈という冒険好きの青年が土佐の破れ庵で良寛に出会った時の様子が記録されている。

良寛は土佐で廃屋を渡り歩く生活をしていて。そこへ旅をしていた万丈の雨やどりのために宿を貸してほしいという要望にこたえた。そこで万丈が見た良寛は僧であるにもかかわらず座禅も読経もしない。そして庵を見たところ、これといった物は無く、唐刻の書物「莊子」二冊があるだけであった。

日本の仏教は道教の「莊子」と儒教の「論語」とを融合し受容した中国仏教經典に拠っていた。良寛が莊子と論語に多大な関心を寄せていたことは、このことによるからである。良寛は曹洞宗の僧であったが、円通寺の後半期にはほとんど宗派の垣根にはこだわらなかった。しかし、この土佐で座禅も読経もしなかったところには、当時の宗門に対する強い批判が込められている。ここで莊子に良寛がたどり着いたことは、さらに広い修行の世界へと導かれたと見るべきである。良寛の遺墨には論語を暗記したものがたくさんある。それは少小期の三峰館でうけた子陽先生の儒学教育に反して、少年期に家と父母を捨てて出奔したものの結局は父母の許しを得て受戒出家するしかなかった経緯に懺悔の心があると見られる。

良寛は38歳の時に父の以南を入水自殺という形で失っている。その後、父の四十九日の法要

で兄弟たちと会い、このような死に方をさせたことを嘆き悲しんでいる。長男でありながら、弟たちに何もしてあげられなかったという痛恨の思いがある。ここで良寛は真の仏性は故郷にあるとして、17年に及ぶ円通寺での生活を捨てた。庵主の地位を捨てての帰郷を決断したので。

こうして良寛は、人々から尊敬を集めるような高僧の身で帰郷したのでもなければ、寺の住職や僧位を得て帰郷したのでもなかった。身にぼろをまとい、おちぶれ果てた乞食の貧僧の姿で帰郷したのである。だがそれは、その姿を人々に見せた忍辱の姿であり、懺悔の姿に身をやつしてであった。良寛の帰郷の根底にあったものはいくつかあると思うが、最も大きなウエイトを占めていたものは、父の死である。それも普通の死に方でなかったことが原因となっている。父は没落しつつある家を見て、家族を守るための武器には名門としての地位しかないと考えたのだろう。それ故に数々のトラブルを引き起こしていたのだろう。そんなふうには良寛は父の死について考えたのではないか。仏教と儒教は良寛にとって一体のものであったから、儒教を生かすこともできず、さりとて宗門の榮譽をもたらすこともできない己れの姿をかえりみて、それは深い反省へとつながったのである。良寛は帰郷した年に、すぐ子陽先生の墓を訪ねた。子陽先生との出会いがなければ、ここで懺悔する良寛も存在していなかったと考えられる。

良寛は帰郷する際、今後の生活に大いなる不安をかかえていた。それは帰郷に至る道順からも見ることができる。円通寺を旅立ち、信州街道に入り善光寺に立ち寄ってから、越後の糸魚川を経て、故郷に帰るという道順であった。ここで問題は糸魚川へ行ったことである。善光寺から北国街道を通れば高田に出るのだが、逆方向の脇街道に入り、沢渡で糸魚川街道に出るという遠回りしたとしか思えないコースをとる。橘屋の長男がこんな姿で人々はどう思うのか。それよりも忍辱の衣を身に着けての修行と懺悔に耐えることができるのか、と漠然としたためらいが、この良寛を迷わせ、それにより糸魚川へと至った理由ではなからうか。

3. 草堂生活

良寛の故郷での草堂生活は、最後の五年間を除き、ほぼ30年にわたって国上山を中心に過ごした。国上山の山腹にあった五合庵と山麓の乙子神社の草庵とである。良寛は39歳の時に帰郷したが、初めは故郷の各所を転々とした10年の住所不定時代だった。48歳の頃から五合庵に定住し、山麓の乙子神社草庵に移ったのは59歳の時である。そして69歳の時に島崎村の木村家裏屋の草庵で暮らしたのである。

帰郷を果たした時にまず住んだのが、郷本の浜辺にあった狷師の塩焼き小屋である。ここは出雲崎の橘屋から、わずか三里しか離れていなかったということから、弟の由之が迎えに来た。しかしこれを拒否し、その後ほかの草庵に移り姿を消した。良寛があえて生家に近いところに姿を見せたのは、亡き父と家族に対する懺悔ではなからうか。生家から離れた、見知らぬ土地では意味がないとしたのだ。この住所不定時代である10年間は、良寛にとっては過酷なものであった。この頃の良寛は懺悔の苦行として、常乞食行に徹底していた。宗門に失望していたが、還俗するなどという考えはみじんも無かった。まして還俗したところで懺悔などできるはずもないと思っていた。良寛は言葉を発することもなく、ただひたすら忍辱の衣を着ることにより、人々から罵倒されることに耐え抜いた。良寛はその思いを詩歌の世界に持ち込んで、自問自答していたのだ。帰郷を果たした翌年には、父の三回忌の法要が行われた。その後に国上山の五合庵に入って、亡き父の霊を供養していたことを遺墨から読み取ることができる。良寛が前年の放浪生活をやめて五合庵に入った背景を考えてみる。帰郷は父への懺悔のためであった。し

かし父のことを思い放浪を続けるほど悲しみが増してくる。故郷に帰ってからは法華懺法に基づいた行動であった。その中で父への供養を継続させながら、衆生済度を行わなければならない。衆生済度を行うことが父へのせめてもの償いであると考えたと思う。

五合庵は国上山中腹にある真言宗豊山派の国上寺の草庵であった。17世紀後半頃、この庵を開いた国上寺の客僧萬元が、寺から一日米五合の援助を受けて住んだところからの庵号だという。良寛が一時入庵した当時は荒れ果てた草庵であった。この孤独な生活のなかで良寛の懺悔は形を変えていく。帰郷してすぐの良寛を救ったものは「騰々として天真に任せる」という自然体の姿であった。そんな良寛に子ども達が反応を示した。それは良寛の苦渋に満ちた懺悔の心を和らげた。

草庵生活をした良寛は、自分の存在とは何かという問いに答えを出そうと模索していた時期であろう。実生活において無力であるこの存在が、どのように生きればこの世に衆生済度をもたらすことができるかをひたすら考えていた。庵はものさびしくて何も無い。極貧の生活で明日の食べる物さえも心配しなくてはならない。だがそんな良寛に徳を認め、次第に人々が訪れるようになる。世俗の権力、地位、名誉、財産に近づかない生活を徹底し、真の仏性を見いだそうとしていたのだ。それは弟の由之が家財を没収されて出雲崎を追放処分になっても、家族が越後に留まることができたことから、良寛の徳望が偉大なものだったと見ることができる。

良寛は社会体制の変革とか、寺社教化による衆生済度というものには期待しなかった。高僧名僧という名において、事を成し導くということは、何よりも嫌いなことであった。もし社会変革を実現したとしても、それは方便によるものでしかない。本当の救済とは何かと悩み考えていた。天明から天保年間にかけての慢性的な飢饉、文化年間の越後農民の一揆打ちこわしの頻発、そして寛政異学の禁にはじまる文化的社会的締め付け、このように生活することが非常に困難な土地で、良寛は具体的な何らかの社会的行動がとれない自分に苦しんでいた。人々から徳のある僧として受け入れられていく度に、この葛藤は大きくなっていったと思われる。

そのような中でも救いは、数々の外護者によって良寛が生活を支えられていたことである。とりわけ阿部定珍との交友関係は、良寛を転機へと導いたと見られる。定珍は良寛より21歳も年少であったが、年齢差を感じさせない友情があった。定珍が良寛の懺悔の志を知り敬意の念を抱き、そして良寛はこの定珍の温かい心に救われていたことが、唱和連作歌からわかる。孤独な忍辱の懺悔では見えなかったが、数多い外護者の温かい心を良寛は感じる。自分が救われているという実感に、衆生済度とは身近なところにあると悟ったのではないか。それは身近な人間関係の接点から救いをあたえることができることを知った。またそれは法華経の人間無差別平等の原理に還っていった。また道元の『正法眼蔵』にある「菩提薩埵四摂法」にいう、布施・愛語・利行・同事の実践行として、村の子どもや農夫たちとも終始なごやかに接した。自警録としての戒語は、その実践徳目の愛語の心得であり、子どもたちとの手まりつき遊びは、同事の実践徳目と見なされる。

良寛はその後、59歳の時に乙子草庵に住んだ。理由としては老齢のため、里への出入りがおっくうになったのと、薪運びや水くみがこたえたようである。この時代に万葉集に深く傾倒するのである。それは禅や宗門に囚われていた良寛からの脱皮であったといってもいい。良寛はここではまず万葉集に朱注を入れながらの研究を行い、それ以後島崎の木村邸内草庵に入ってから、記紀歌謡、万葉集、古今集の歌境を駆使して、まさに良寛調の歌を完成させたのである。良寛をここまでにしたのは亡き父の影響であり、それは大村光枝によってもたらされた。江戸

の国学者であった光枝は寛政元年に越後を訪れ、翌2年に出雲崎の橋屋に立ち寄り、以南や由之らの歓迎を受けている。その頃の良寛は円通寺修行時代であり、出雲崎にはいなかった。光枝は以南と意気投合し万葉について話したと、自筆紀行集「越後の記」で示している。その話を良寛は44歳の時に、五合庵を訪れた光枝に直接聞いたのだろう。この出会いが良寛に大きな影響を与えたことはまちがいない。万葉を学ぶことは父への懺悔の思いであり、鎮魂歌だったのである。

良寛は74歳で亡くなるまで、衆生済度を実現させようとする仏道修行者であった。それは漢詩や和歌、書芸などの芸術により示そうとしたのではないか。現在でも良寛の芸術は色褪せてはいない。それは良寛の衆生済度が時間も空間をも越える真のものだったからであるといえる。

第三章 心の安定

1. 無所有に生きるとはどういうことか

良寛が無所有の境涯に甘んじた理由は、物に満たされても精神的には満たされないことを、幼いときに知ったのだろう。良寛の幼年時代は、まるで現代と共通しているようにさえ感じられる。それは物を与えることが、子どもの幸せであると錯覚してしまっていることだ。良寛の父が出雲崎の名主であったことは、生家が財力に恵まれていたことがわかる。だが良寛は両親の愛情に飢えていたのではなからうか。父以南は地方に聞こえた俳諧の宗匠であったから、家を空けることも多くあまり家庭を顧みなかったのではないだろうか。現在とは違って家庭も封建的な時代であり、父が絶対の権力であった。母はしばしば家を留守にする父の代わりに、家計のやりくりを支えていたのだろう。もっとあふれるような愛情を与えてやりたいとは思っても、それはできなかった。大森子陽の学塾三峰館にも、地位と財力があつたからこそ良寛は学ぶことができた。勉学は好きであったが、満たされない思いからか酒や女遊びにも多感に心を費やしたという。そんな財力には恵まれた生活ではあつたが、良寛の内面は孤独であった。そして父へは自分の思うこともいえず、ただ従うことしかない。そんな苦しい生活であった。良寛が望んだものは、貧しくてもいい、ただ家族団欒のひと時ではなかつたろうか。だが現実的にそのような願望は夢であり、名主である家柄が自らを締め付け、行きどころのない悩みは良寛を追い詰め、ついには絶望的な気持ちにさせただろう。良寛は金を使い、物に満たされることしかできなかった。求めていたものは、ただ家族の愛情だけであつた。

現在は物さえ与えれば、子どもが幸せになれると錯覚してしまう。また金だけを子どもに与えて、後は放任することもある。物質だけ恵まれていても、それは幸せなことではないと良寛の幼年時代からみることができる。良寛の生涯は地位にも財産にも束縛されず無所有でその精神は解放されていた。世間一般の成功者というより、敗北者として見てしまう。しかし、それでは本当の良寛像は見えてこないのではないか。良寛はその生涯の生き方を模索して貫いた。それは物質に救いはないという悟りによっての行動であつた。

2. 限りない欲求と「騰々天真に任す」ことの比較

良寛の自然に任せた生き様は、「騰々として天真に任せる」というものであつた。それは自然に任せて乞食をして生きることを、人々が見てどのように解釈しても、すべてはありのまま受け入れて生きることであつた。それは忍辱の修行であり、その思想の中には徳川幕藩体制への批判も込められている。

文政11年、71歳の良寛は厳しい社会批判をしている。それは死者1,607名という三条大地震についての詩「地震後詩」から見るができる。良寛は地震の後で三条を訪れ、その惨状を見てただ涙するばかりであった。そしてこの地震は天災ではなく、人災であると語った。良寛は地震が自然現象であることは、もちろん知っていた。しかし、当時の人々は太平の世に慣れて、道徳が軽んじられ、平気で人を騙すことが賢いとされる風潮になっている。それほど人々の心は地に落ちてしまっている。そのことが地震を引き起こしたと、その詩の中で嘆いている。それは必ずしも災害を受けた人に対して無慈悲であったわけではなく、一般の世相を嘆いたのである。これを避けるためには人々に各自が身を引き締めて、道義にはずれないようにと訴えている。ここに良寛の切実な願いがある。この願いは現代の我々の世相をそのまま嘆いているようだ。

良寛がこの地震時の世を嘆いた背景には、この墮落した世をそのまま宗門の墮落に重ねて見ていたのではないだろうか。良寛が宗門を捨てたのは、世俗と何も変わらない権力が支配する世界であったからだ。徳川幕藩制の下で、単なる行政機関の手先に成り下がった寺院仏教というものに入ろうとしなかったのは、良寛の抵抗精神であった。その抵抗精神は、徳川体制文化の拒否である「三嫌」という形で徹底していた。嫌いなものというのは詩人の詩または歌人の歌、書家の書、料理人の料理であった。そこには流派に囚われ、型に嵌らざるをえなくなる、功名心というものしか存在しない場になってしまう。そこには本来の姿がまるで見えてこない。そしてまた新たな利権争奪が生まれる。そういう弊害に陥りがちな風潮を憎み、これを拒否したのである。

そのような社会風潮を否定し、自然に任せるという境地を貫いたのだと思う。その生涯の行動こそ良寛の意図した権力に対する反発だったのではないだろうか。人々の限りない欲求が行き着く先には、権力闘争しか見えない。そのことを嘆き、良寛は騰々天真に任せた生涯を送ることにこそ、衆生済度を実現できる根本の精神態度があったとしたのではないだろうか。

3. 真の豊かさとは

今、日本は豊かな物質文化に支えられ、基本的な人間生活を営むことには不便しない。それがあたりまえのように感じられ、感謝することを忘れてしまう。衣食に満たされていて、しかも住居に保護されている。そこには物質的な意味での不安は存在しない。それだからなのか、それにもかかわらずと見るべきか、そのような恵まれた生活の中にいるのだが、絶えず不平不満を言い、自己の欲求を満たすことだけに逃げ場を求めていると思われる。

良寛の生涯は、常に自分の存在理由を求める葛藤の日々であった。出雲崎名主の長男として名主を継ぐことを捨てた。宗門のありかたに悩み、真剣に衆生済度の道を宗龍和尚と模索して、その果てに宗門を捨てた。そして托鉢による乞食によって生きる自分は何者であるのかをかみしめて生き抜いた。そこに地位と名誉を捨てた自然体の姿を見ることができる。現代人は何かを失うことを極端に恐れてしまう。物質的には財産をはじめとする既得権の保守、精神的には社会的地位や対面、名誉というものだろうか。私はそのことが間違いだとは思わない。しかし、それを不当に守ろうとするとところに猜疑心が生まれ、新たな悲劇に姿をかえる種子があるといえるのではないだろうか。良寛の出家橘屋が消滅したのも、このようなところに原因があるのではないと思う。

必ずしも財力が真の繁栄であるとはいえない。かつての栄華を誇った橘屋も、これに対抗し

名主の座を奪った敦賀屋烏井氏も、尼瀬を取り仕切った京屋野口氏も今はない。だが、良寛の外護者であった解良家、阿部家、原田家をはじめ、島崎の木村家などはいまも健在である。それは何を意味するのだろうか。たとえ一時だけ財を成しても、それは豊かであると結論を出すことは適切ではない。長い歴史の中で、はじめてそれが豊かであったか、そうでないのかを証明してくれる。これについては歳月が経過してもなお存在するものこそが、真の豊かさであると言いうことができるのではないだろうか。

良寛の生活は自然体貫いた。外見的にみればそれは無所有の極貧なものでしかないようではあったが、単なる世捨て人ではなかった。そこには衆生済度を実現させようと考え、自らの意志で仏道修行者として生きた姿がある。そこにこそ、人間の真の豊かさの内実があるのではないだろうか。没後170年を経ても良寛が存在していたことは忘れられていない。そして歴史においても、その名が否定されることはないであろう。このことこそ、良寛の生涯が豊かなものであったと、証明することができるだろう。

現代人は限りなく盲目的な欲求に駆り立てられ、それがどのような結果を生むのか、再度考えてみる必要があるだろう。欲望を抱くことが間違いではない。しかし、その欲望が名利や抗争を生み出すものであってはならない。真の豊かさを望むとき、それは自己の存在が社会にとって有益なものでなくてはならないだろう。そしてそれを証明してくれるのは時の経過である。そのことを認識し、日々を生きることが本当の幸せへの入口であり、真の豊かさへの大道であると言えるのではないだろうか。

おわりに

良寛を真に理解するには、仏教、漢詩、和歌そして書についての基礎知識と問題点を理解していなければ充分なことを述べることはできない。私はこの論文を無教養の中で、書き上げた。そのため良寛の思想を真に理解できているとは言えないということを痛感した。

良寛が何を願って生きたか、この答えを出すことは非常に難しいことだと感じている。良寛のその生涯は、その価値観や生活形態をとってみてもあまりにも一般人とかけ離れている。しかし、その生活の中には絶えず人々との和を大切にしていたことでは一貫している。そこにこそ衆生済度へのキー・ポイントがあるとしていたのだろうか。そのようなことを考え、第三章では結論を述べたが、あまりにも強引な推論が、ところどころにあることは否めない。書き進めていく度に、どんどん解からなくなっていったというのが正直なところである。現時点での自分の力の限界なのだろうが、やむをえない。

私はこの論文を書き上げて、あまりにも良寛とその時代についての知識がないことを痛感した。徳川幕藩体制時代の社会のありようはどのようなものなのか、人々の生活状況は、仏教思想については、そして漢詩や和歌、書の世界はと挙げていけば限りがないほどである。しかし自分の知識がないことを改めて認識したことに、新たな目標ができた。ここで良寛研究を終わらせることはできない。もう一度じっくりと読み直し考え直して、納得のいくような結論を出すことが必要だと考えている。

参考文献

- 北川省一『良寛—その大愚の生涯』東京白川書院、1980年。
北川省一『定本良寛游戲』東京白川書院、1983年。
栗田勇『道元・一遍・良寛—日本人のこころ』春秋社、1990年。
末木文美士『日本仏教史—思想史としてのアプローチ』新潮社、1992年。
高橋庄次『手毬つく良寛』春秋社、1997年。
高橋庄次『良寛伝記考説』春秋社、1998年。
谷川敏朗『良寛の生涯と逸話』恒文社、1984年。
谷川敏朗『カラー図説—良寛の生涯』恒文社、1986年。
谷川敏朗『校注良寛全詩集』春秋社、1998年。
中野孝次『良寛の呼ぶ聲』春秋社、1995年。
中野孝次『良寛に会う旅』春秋社、1997年。
林謙三『人間良寛—日本のお釈迦さま』考古堂書店、1990年。
松本市壽『野の良寛—良寛禪師奇話を読む』未来社、1998年。

(卒論指導教員 山田耕太)